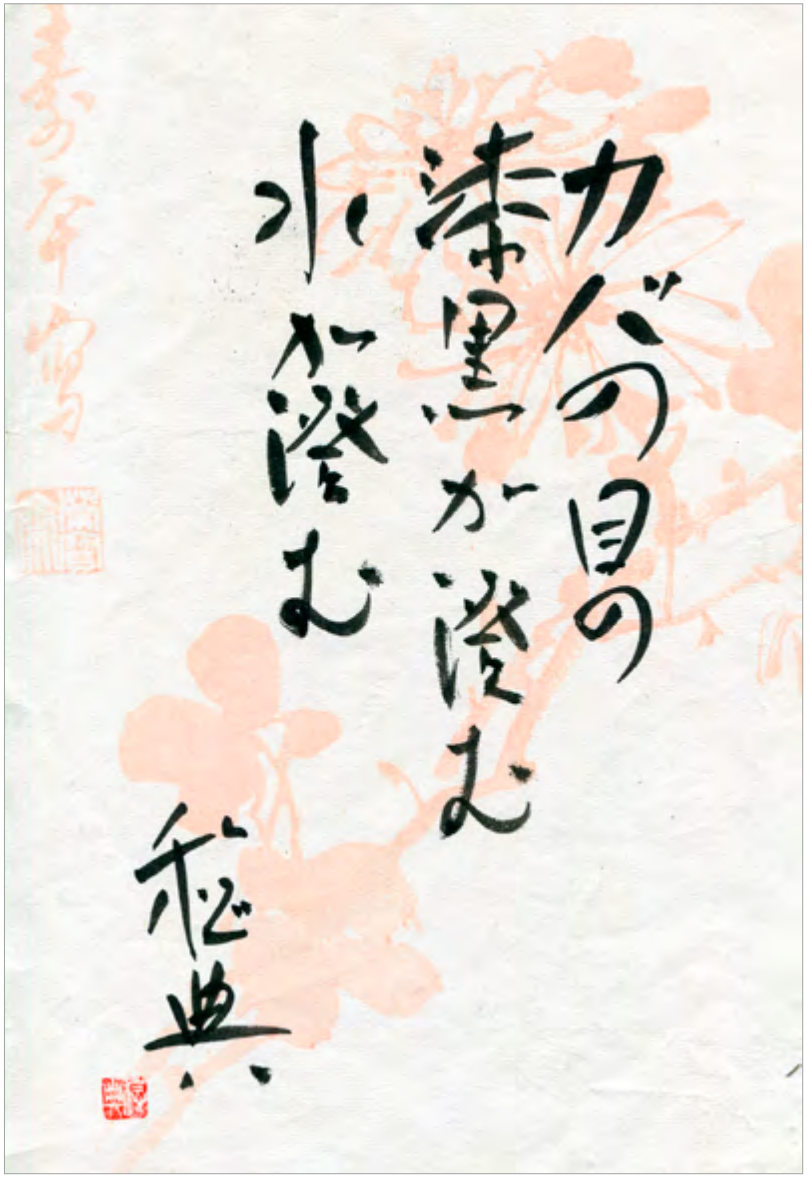
あさ 10

2017


カバの目の
漆黒が澄む
小春日和
秋典

あと

十　月

豆ご飯

東京　佐藤　喜孝

考へてかんがへて啼く鴉の子
遺されたか朱雀色なる牡丹の芽
晩餐の〆に叶ひし豆ご飯
ジャングルジムは別のからっぽ夏休
その上に乗せてみてゐる蓮の花

外堀

東京　篠田　純子

落蝉をそろりと咥へ鴉発つ
夏草を刈られ外堀急峻なり
ごきぶりと同方向へ逃げまどふ
無いか無いかあるよあるよナイターの街
赤トンボ街頭立会演説会

石川　定梶じょう

盆休

コロッケ店日覆深く下ろす頃
風鈴の鳴らぬやうになった軒先
べた凪であるゆゑ日雷怖し
三伏のぶりき鋏の大きな柄
藪そばの二丁目店が盆休

埼玉　須賀　敏子

新涼

新涼や新幹線の窓明り
新涼の日本の空をミサイルが
新涼（翔馬）やクロールの少年の脛
新涼（きなこ）や無敵の猫と遊びけり
新涼や長編一気読みをして「土の記上・下」

東京　田中　藤穂

八月

八月や広島御巣鷹御詔勅
ミーンミンミン今死ぬごとく県命に
甚平や思ひ出す人三人程
昨夜の雨たっぷり含む葛の崖
百才の恩師の訃報秋の虹

三重　長崎　桂子

秋暑し

一点を競ふ球児の秋暑し
笛太鼓踊りは跳ねる秋暑し
秋暑し無形文化遺産の鯨船
列島に災害つづく盆供養
八月尽雲は激しく掻回す

東京　森　なほ子

夏了る

オープンカフェ椅子片寄せて秋の雨
晩夏かな修道院の草も木も
木々の間に避暑のホテルの赤き屋根
驟雨聴く山のホテルのトイレット
夕霧をあえかにまとひ梓川

東京　赤座　典子

初秋

色薄き初コスモスの七曲り
つづら折ミラーを囲む葛の花
田の水面色無き風に揺れもせず
闇夜にも房くっきりと鬼胡桃
ブルーベリーの眸(め)よ八月のマルチーズ

埼玉　秋川　泉

夏闌ける

雹の降る音とどろきて窓割るる
ぱきぱきと句を詠む人とかき氷
特大のふはりととけるかき氷
泡盛の刺す味もあり終戦日
遠花火約束いまだ果たされず

東京　石森　理和

秋桜

電話鳴る知人の息子蓮の露
惜み鳴く夜昼問わぬ鉦叩
ゆく雲の今年は一人秋桜
雷鳴の頭上離れず強張りぬ
黒い服お数珠も終ひ冷し酒

埼玉　大日向幸江

パンダ

絵日記にパンダを描く夏休み
裏庭に猫の出るなり遠花火
夏の雨オリビアの曲懐ひ日
ゴーヤーチャンプル肌に馴染みし秋の雨
苦瓜の四、五本届き思案顔

千葉　黒澤　佳子

ハンカチ

冷奴吾は絹ごし夫木綿
夏痩の息子笑顔や小笠原
箪笥整理白のハンカチ数へをり
水替へて花魁草の濃くなりぬ
腰高の触れる水引こそばゆし

東京　七郎衛門吉保

夏の終り

散歩車の園児のやうに桃並ぶ
桃くるむ網目クッション桃の色
錦鯉沼に尾鰭の波立り
草いきれ佐渡が見えると農夫かな
絵日記に忘れものあり夏休み

前月抄

御目出糖甘露子清白ふたりして　佐藤喜孝

瑠璃蜥蜴花魁のごと振り返る　七郎衛門吉保

自分より朝顔に先水一杯　篠田純子

梅筵とり込み目鼻たそがるる　定梶じょう

水無月や洗濯バサミ劣化せり　須賀敏子

怒りありてゆく投票の暑き道　田中藤穂

歩く会緑蔭もなき石の椅子　長崎桂子

サザエさん終はり紫陽花まだ見ゆる　森なほ子

晩涼に日数分の飲み薬　赤座典子

にび色の雲をはらひて梅雨の月　秋川泉

焼蜀黍ふる里の海引き強し　石森理和

まつり囃子遠くに聴こえ梅を干す　大日向幸江

夏痩せね言葉やはらか栄養士　黒澤佳子

八月号作品より

秋川泉・森なほ子

電話口といふところあり冷さうめん　佐藤　喜孝

今まで思い違いをしていて、電話口というのは電話を置いてあるあたりのことだと漠然と思っていました。昔から玄関の上がったところとか、廊下や部屋の隅とかがあの黒電話の居場所。と思っていたのですが、念のためと調べたら、電話口とは電話の受話器の両端のこととありました。さて先生は、この意味での電話口だったのか、それとも……。でも、冷そうめんという季語には、黒電話の置いてある昭和の家の佇まいがなじむ気がします。単なる受話器の両端ではなく。（なほ子）

鎌倉の切通し抜け竹落葉　黒澤　佳子

鎌倉の七切通しのどちらを歩まれたのでしょう。この句から頼朝の時代からの歴史の世界に誘われ、しばし古道の雰囲気にひたりました。竹落葉の趣き深い季節。素晴らしい歴史散策を楽しまれたのですね。（泉）

奔放な高校生の句の涼気　七郎衛門吉保

毎年八月に愛媛県松山市で開催される「俳句甲子園」をすぐに思いました。「高校生にしか語れない俳句がある」と。本当に若い感性のほとばしる句は、その時代を過ぎた者には、若いエネルギー溢れる句が眩しく感動致します。（泉）

女子寮生大広間にて浴衣裁つ　篠田　純子

大広間での互いに話し合ったり教えあったりの景がうかびます。若い感性と会話。美しく魅力的な清々しさを覚えます。見守る作者の温かなまなざしが素敵です。（泉）

外海のあをさの網戸立ててけり　定梶じょう

今年も網戸を立てる季節になりました。真新しい網戸を立てると青々と一度に涼しくなったようです。その青さは外海のあおさと。いかにも海が身近にあるひとの表現だと思います。簡潔さが爽やかな一句ですね！（なほ子）

蜜柑咲くゆるりゆったり天浜線　須賀　敏子

天竜浜名湖鉄道というタイトルです。ローカル線、日本有数の蜜柑どころ、窓を開ける風は甘い花の香り。ゆるりゆったりに旅の楽しさが言い尽くされています。（なほ子）

梅雨冷や医院待合室の絵本　田中　藤穂

梅雨の頃、ちょっとした不調で？医院に行かれたのでしょうか、待合室に絵本がおかれています。ふと懐かしくなって手にとってみると、子供が小さかった頃のことが思い出されます。（なほ子）

夏の海歩むズボンをたくしあげ　長崎　桂子

夏の海に来て童心に帰り、波打ち際を歩きたくなった作者です。その気持ちよ～くわかります。寄せる波返す波に戯れて、たくしあげたズボンの裾を結局は濡らしてしまったのではありませんか？（なほ子）

古代蓮青い蜻蛉がきて止まる　早崎　泰江

昭和二十六年千葉県検見川の泥炭地で大賀一

朗博士と地元小中学生によって発掘された蓮の実。同時に発掘された舟などにより縄文時代と判明。昭和二十七年二千年の眠りから目を覚まし見事に花を咲かせた。このニュースは世界を駆け巡り、その人気は今も衰えない。そんなロマン溢れる古代蓮に蜻蛉が。二つの生命の呼応を感じる句です。（泉）

日のさせば発火しさうなアマリリス　　森　なほ子

アマリリスはヒガンバナ科の植物。まっすぐに伸びた茎に優雅で気品漂う大輪の花を咲かせる。そのアマリリスに強い夏の日差しが射した。その刹那の〝美〟を鮮やかに見事に表した句。何と美しいことでしょう。（泉）

真緑の桃の実の待つ袋掛　　赤座　典子

まだ小さくて青い、できたばかりの桃の実。袋掛けにはまだまだ時間がかかります。それから熟れてゆくまでにさらに。「待つ」という言葉、擬人法ではありますが、待っているのは桃の実というより農家のかた達ですよね。（なほ子）

文を書くはじまりは雨水無月の　　秋川　泉

歌詞のように滑らかな調べです。この自然さが素敵ですね！さらさらと流れるような達筆まで思われます。外はしとしと梅雨のさなか、つい長い手紙になったようです。（なほ子）

紫陽花の車窓に続くスイッチバック　　石森　理和

箱根登山鉄道のスイッチバックでしょうか。〝あじさい電車〟の愛称で親しまれています。ゆっくり走る登山電車からの咲き誇る紫陽花を心ゆくまで楽しまれたことでしょう。（泉）

フラメンコ灼熱の夜を踊りけり　　大日向幸江

スペインの本場のフラメンコをご覧になったのでしょうか。「灼熱の夜を」という中七にとてもこころひかれました。歌、踊り、ギター伴奏が一体となって、真っ赤な踊り子のドレスが連想され、フラメンコの情熱的な歌舞音曲に掛け声（ハレオ）、酔い痴れる人を想いました。（泉）

比来披見

ホトトギス　九月号

秋の夜の一人の自由とは淋し　稲畑　汀子
天守閣てふ露の世を知る高さ　稲畑廣太郎

沖　九月号

晩夏なり男料理の砂時計　能村　研三

雨月　九月号

近江路を行くや麦秋また麦秋　大橋　晄

槐　九月号

幕末のごとくに入道雲崩る　高橋　将夫

馬酔木　九月号

碑に波郷の文字の涼しさよ　徳田千鶴子

風土　九月号

深く踏む龍太が留守の竹落葉　南　うみを

京鹿子　九月号

雪渓や村の鎮守の青々と　鈴鹿　呂仁

六花　九月号

長き夜へ夢の寝返り打ちにけり　山田　八甲

万象　九月号

梅雨晴をながめそのまま眠りたる　大坪　景章
日蔭には日蔭の白さ山ぼふし　内海　良太

春燈　九月号

紫陽花の名残の花も大暑かな　安立　公彦

鴫　九月号

髪洗ふ菜をあらふやう扱きつつ　高橋　道子

喜孝抄

末黒野　九月号

朝な朝な掃く紫の桜の実　小川　玉泉
麦秋や真水のごとく空清く　松本三千夫

雲の峰　九月号

海越しに火の見の見ゆる鯊日和　朝妻　力

集　65号

夏の海防風林の松の形　大山　夏子

澪　九月号

草臥れて坐れば小雀親雀　松林　尚志
島唄踊る男女は素足草を踏み　藤田　宏

船団　一一三号

立春の友だち土を踏んできた　坪内　稔典
待ち人はどんな人やら初みくじ　佐々木麻里
父という正しき人といて薺　高田　留美
初うんこ酒の金箔混じるらん　千成　希妙
火星語がペラペラなんて初夢(ゆめ)かしら　寺田　伸一
満月のうしろにでかいコンセント　ねじめ正一
ニワトリのまさひろ君も四日かな　火箱　ひろ
真空の廊下の先の桜餅　藤井なお子
初雪を消防署へと消防車　藤田　俊
初富士は三波春夫でございます　三宅やよい
恋情は自然消滅蜷の道　内田　美紗
代官にされるがままの栗羊羹　秋山　泰

あをキーワード俳句辞典（ながーなが）

永井荷風

春陰や永井荷風の靴の泥　竹内　弘子

長い

啓蟄や腰まで長い髪の人　芝宮須磨子
長い足かがめて蜘蛛の秋に死す　鎌倉喜久恵
喘鳴と長いつきあひ梅を干す　長崎　桂子
国宝の前の日向に長い猫　佐藤　喜孝
長い長いエスカレーター冴返る　木村茂登子
長い列あれば並んで夏期休暇　堀内　一郎
細長い闇をおもへり秋の蛇　竹内　弘子
花了る飛行機雲の長いこと　須賀　敏子

永い

永いなが冬眠か次ぎつぎに　堀内　一郎

長き

烏瓜長き蔓先恵方より　東　亜　未
初つばめ土手の長きをたのしめり　早崎　泰江
教会の長き木の椅子桐の花　田中　藤穂
日脚伸ぶ禁裏の長き土塀かな　芝　尚子
点滴の長き間合を春夕焼　田中　藤穂
蓑虫の糸の長きはさびしいから　定梶じょう
さんま嫌ひの妻とも長き縁なる　堀内　一郎
長き塀来てふりむけば長き塀　定梶じょう
耕して畝の長きとふりかへる　長崎　桂子
渾身の長き手紙を書く夜寒　石森　理和
田舎間に脛長き人花の昼　東　亜　未
若葉風少女に長きトロンボーン　早崎　泰江
怠れば目の前を蚊の長き脚　渡邉　友七
水仙花受験の子等の長き列　山荘　慶子
薄もみぢ長き廊下に散り込める　竹内　弘子
峡を出て青野に貨車の長きこと　定梶じょう
空蝉の歩いてゐるよ長き道　佐藤　喜孝
黒板の長き受け皿夏休　佐藤　喜孝
冬の芽や土の香残る長き壕　赤座　典子
初日の出土手ゆく我の長き影　山荘　慶子
秋蝶の長き飛翔をいぶかしむ　佐藤　喜孝
おめでたうの長き蝋燭さくらんぼ　赤座　典子
細長き路地に風行く夏暖簾　篠田　純子
猫預け長き一日花八手　斉藤　裕子
鼻長きバスに酔ひしも青田道　森　なほ子

永き

今日生れて永き夢見し蝉の鳴く　芝　尚子
烏賊舟や永きたそがれ経て灯る　定梶じょう
永き停電愉しむごとし囲炉裏の焔　定梶じょう

はしかけて集

佐藤喜孝

定梶じょう

白日傘足場の左官が目送す
ひそけさは飛びたつ構へ川蜻蛉
夕ぐれの簾のうちはまだ点けず
夕立にふられてしまひアド・バルーン
サングラス鏡の中にいかがはし

ひそけさは飛びたつ構へ川蜻蛉

蜻蛉と違ひ川蜻蛉は優しい飛び方をする。止まってゐるところも涼しげなところの印象がある。蜻蛉は翅を水平にして止まり、川蜻蛉は翅を合わせてとまるやうだ。この川蜻蛉が止まって居る様子を「ひそけさ」と見、飛びたつ寸前の構えと見た。静かで緊迫した景である。川蜻蛉と向きあふひととき。きっと作者は蜻蛉が好きなのであらう。わたしは鉛筆はトンボ、ハモニカもトンボを愛用してきた。

サングラス鏡の中にいかがはし

自画像である。じょうさんは『あを』に

路地間違へたらしいサングラスを外す
サングラスかけゐて手持ち無沙汰かな

とサングラスの句を発表してゐる。きっと愛用されてゐるやも知れぬ。「いかがはし」は続く「者がゐる」が省略されてゐる面白い表現。

七郎衛門吉保

フィヨルドの箱庭にあり旅の船
フィヨルドや巨船も遊ぶ白夜かな
フィヨルドや聳然とあり氷河傷
フィヨルドに手車めける滝の糸
フィヨルドの三角ベースの青田かな

フィヨルドの箱庭にあり旅の船

難しい外国詠に挑まれた。しかもフィヨルドといふ日本にゐては想像も及ばないとてつもない大きさと特異な景観。俳句はカメラとは違ふので苦労が忍ばれる。余りに大きな見事な景。吉保さんは箱庭の中にゐるように思へた。この感覚行ったこともないわたしにも分かるやうな気がする。「旅の船」は視覚的な表現がよいのでは。フィヨルドはモニターで見るだけでも溜め息が出る美しさ、こういふ場所で俳句はだう立ち向かへばよいのか、考へさせられる。

田中藤穂

雹被害残る家並御輿渡御
ドーンドーンカッカッカッと山車廻る
賑やかな祭太鼓に暮るる町
夾竹桃闇市ありしこの広場
土用波鍔広帽子飛んでくる

ドーンドーンカッカッカッと山車廻る

「雹被害残る家並御輿渡御」といふ句も作られてゐる。話を聞いたが本当に大きな雹であったさうだ。何かと気候が変梃なこのごろ、それを吹き払ふごとく昔ながらに山車が太鼓の響きとともに町内を練り歩く。山車の上では小学生か就学前の子が真剣な眼差しで太鼓を叩いてゐる。いつもの見慣れた風景、聞き慣れた音に日頃の憂さも少しは晴れる。「ドーンドーンカッカッカッ」は録音とはまた違ふ趣があった。因みに最近読んだ句に、

ドンドンドーンドンドンドーン　桑原　汽日
カンカンカカンカーンカーン

井上石動

ひと挿しの桔梗片方の紫煙邪魔
秋めけり鼓の音も笛の音も
一団は闇から生まる風の盆
しき浪のあなたは佐渡か鰯雲
数珠玉や横絲赤き古布それこれ

しき浪のあなたは佐渡か鰯雲

大景。鰯雲が広がる下の大海原。見えぬ佐渡を思ふがゆゑに佐渡を恋ふ思ひがつのる。古語のしきなみがここぞと読むもののこころを昂ぶらせる。しき波に漢字を当てると頻波・重波とあった。その場に立ったことのないわたしにも空気感が伝はってくる。

大日向幸江

運動会行儀正しく一年生
冬瓜も夕顔も又茜色
虫時雨いつかいつかの宮詣
手の中に捕ったばかりの黄金虫
台風の渦巻く雲や睨みをり

運動会行儀正しく一年生

高学年とは違ひ昨年までは幼稚園・保育園の年長さんであったが、ことしは見上げる様な生徒に囲まれた運動会。「行儀正しく」はこの一年生の挙動を的確に捉えた表現。勿論高学年が行儀正しくないといふ訳では無い。近頃の運動会は本当に楽しめる。孫が出てゐるからといふほかにも、わたしが知ってゐる民謡をアレンジした音楽に合わせ元気に演舞をしたり、走れない子も楽しそうに参加、ゴールをするとみんなで拍手。少し淋しいのは一緒に昼食が出来なくなったことだ。些細なことだが。

秋川　泉

災天や働く人の影の濃く
暑気払ひ怪談きくも夜の冷えず
髪洗ふおうなの横で猫ねむる
昨日にて蝉鳴き納め雨の降る

災天や働く人の影の濃く

炎天下の影は、そのまま地上に焼き付いて残ってしまふかと思ふ程である。いろいろな人が炎天下で動いているが、働く人におもひを寄せたところがこの句の眼目。しかし「炎天や」では影の濃いのは炎天ゆゑにとなり説明になってしまふ。ここは暑さを想起させる植物など配することで説明句を避けられるとおもった。

赤座典子

秋立つ日海に白夜の終りける
デザートの大皿に散る石榴の実
岩また岩杖を頼りに登高す
絵本のやうな秋麗の街旅券失す
秋興や隠れ家といふ美術館

秋興や隠れ家といふ美術館

作者の添え書きに「隠れ家」は「エルミタージュ美術館」のこととあった。あの壮大なロシアの美術館がなぜフランス語の「隠れ家」になったのか皆目分からない。典子さんもそのことに興味を持たれて一句に仕立てたのだらう。外国旅吟の難しさは読み手が知らぬことを伝える難しさにある。使ふ季語も日本とは違ふ苦労があると思ふ。旅券を取られたことを除いては季語の通り秋の趣を楽しまれたことであらふ。

須賀敏子

夏野行く後ろ姿を気に掛けて
初生りのゴーヤくの字に近くなり
流木に壊れゆく家夏豪雨
するすると子猫網戸を登りけり

初生りのゴーヤくの字に近くなり

近年街中でゴーヤーを育ててゐるところに出会ふ。なぜか八百屋に並んでゐる、いやスーパーに並んでゐる苦瓜には遠く及ばない苦瓜が下がってゐる。それでも実がなればたのしみだ。しかし実に育つ前に残念ながら落ちてしまふ。そんな中、くの字に曲がっても育つのを見るのは毎日の楽しみ。ラジオで沖縄の人は「ゴーヤー」と伸ばさなければ気が済まぬと聴いた。苦瓜と云ふ人が少なくなったこのごろである。

石森理和

唐辛子内藤新宿赤絨緞
新調の服はいらない唐辛子

鳥虫も素通り決めし青い柚
水遣りの朝顔の鉢持ち込まれ

水遣りの朝顔の鉢持ち込まれ

夏休に子供が学校から朝顔の鉢を持ち帰ってきたのだらうか。「持ち込まれ」には、なにか親や祖父母が水やりなど任された感じが読みとれる。ネットを覗くと、数日家を空ける時の朝顔の水やりの仕方など出てくる。始業式には学校へ持っていくところもあると聞くから大変。家族での一大イベント?。昔日、わたしの夏休み帳の表紙は父の朝顔の絵で飾ってあったのを思ひ出した。いまも昔に変はらぬ夏休風物である。。

月刊 俳句界 2017年12月号

平成俳句検証
～平成を代表する俳人、平成を代表する一句

アンケートから見える平成俳句
長谷川櫂 岸本尚毅

俳句界NOW 栗田やすし

俳句界 彬と時実新子

萩谷麻衣子

株式会社文學の森
TEL.03-6262-9196 URL http://www.bungaku.com

佐藤喜孝 著

青寫眞を読む 四

佐藤 恭子

桃のうちに食ひて捨てけり桃の實を

この句を読んですぐ思いだしたもの、小さい頃母や祖母に聞かされた昔話のうちの桃太郎の話でした。「昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは……桃がどんぶらこどんぶらこと流れてきました。」

桃のうちに食べてしまうのはあたりまえのことである。あたりまえかあと思った途端思い出したのが前記の話である。桃のうちに早く食べてしまわないと「桃からうまれた桃太郎」になってしまうのではないかと、ふと思ったことが句になった。食べてしまってからでも桃太郎が生まれるかも知れない。小さい頃見た絵本を思い出してみると桃の真ん中から確かに桃太郎が生まれたように描かれていた。種から桃太郎が生まれるのだ。こんな思いが根底にあって、この夢のような楽しい句が出来たのだろう。もっと続きが、桃太郎の話からひろがると面白いと思った。

山上の鞦韆蹴れば魑魅魍魎

魑は虎の形をした山の神、魅は猪頭人形の沢の神、魍魎は水の神とか山川の精と広辞苑に書いてある。山上に

ぶらんこがあること自体が面白い。頂上に登ったらぶらんこが目前にあったことがあるのだろうか。　山上にぶらんこがあるだけで奇妙ではあるのに、ぶらんこの上に乗って漕ぐすなわち蹴ると神々だと言っている。ぶらんこを漕いでいると小さい時に経験したのだが、だんだん高く漕ぎたくなってくる。もっともっとと漕いでいるうちに地面と宙との境がわからなくなってくる。ふわっと違う世界がひらけてきてしまうのだ。その天地の堺がわからなくなって神々の世へ行ったような錯覚に陥る。自分の知らない世界にとびこんでしまったようだ。異時空間が体験できた。ぶらんこも満更嫌でもないような気になってきた。子育ての時子供がぶらんこから手を離してすとんとぶらんこから飛び出て、前に落ちた時の事がまだ頭に残っていて、その時の恐怖感が残っていたのだがこの句を読んで少しうすらいだ。

茄子の木の葉は茄子紺を逃れ得し

「秋茄子は嫁に食わすな」と言う諺があるが、茄子は何の料理にしても美味しい。漬け物は糠漬け・塩漬けとも美味しく大好きだ。秋茄子は美味しいから嫁に食べさせるなと姑側から言った言葉だとばかり思っていたが一説には違う説もあるらしい。秋茄子は皮が固いので消化が悪い、躰を冷やすので妊娠する可能性があるお嫁さんには予防に食べてはいけない等の理由もあるらしい。

あの食欲をそそる茄子の紺色を葉っぱはしていない。その葉に対して「逃れ得し」と言った。

逃れ得しとは葉っぱ自身がそう思って望んだのだと作者は言っている。葉っぱは葉っぱ自身なのだと言うことを主張している。このように断定されると、本当にそう言っているのだろうと納得させられてしまう。俳句とは面白い。

水の上は夢のごとくや牛飼座

六月下旬頃真上に見える星座である。

牛飼座は空にあるときには発光体であるが、水の上にあるときには発光体ではなくなる。空からの贈り物だと思っている。空でかがやいていたものが水の上に落ちてきたように光っている。天上にあるときと違って星自身の意志が水の上では感じられた。少しの風によっても水面が僅かに揺れる。またなにか物が落ちても水面に波が

立つ。そのたびにあっちに光りこっちでひかり又突如波の具合で消えたりもする。いろいろな状態によってその時々による形で楽しんでいる。星座が色々な形に変化するわけではないが水の上では形の変化を星が愉しんでいるようで「夢のごとくや」と言っている。星座そのものが嬉しがっているようだと……。

こういう感性は羨ましい。

投身のやすけくあらむ浮人形

身を水中に投じてしまえば安らかなことであろう。それに引き替え浮人形は！

まさに身投げをしてしまえば、この世の苦しみから自分自身は逃れることが出来る。諸々の浮世からの脱出を投身によって成就できれば本当に安らかであろう我が身になれるというものである。それに引き替え浮き人形は……。

みめよけれ子を得てつくる雪兎
雪に欲心兎のかたちにしてみると

東京にはなかなか雪が積もるという事が少ない。親バカという言葉があるが、子どもが生まれるまでは五体満足ならと言っているがいざ生まれてだんだん大きくなってくると、可愛い方がよいのだ。道で出合ったときの挨拶が「まあ可愛い顔をして」と始まる。

子供と一緒に作っている兎もご多分にもれず、吾が子に託すのであろうか「見目よけれ」となってしまう。どこの親も大同小異であろう。

二句目も同じことである。雪に欲心といっているが、作者に欲心と置き換えると良くわかる。一句目と同じで兎にちゃんと見えるようにと作るのである。

それにしても地球上は大変なことになっている。人差し指の下にあるボタンに力を入れるとどの位離れているのだろうか、海・陸をひとっ飛びで殺りく兵器がとんでいく「みめよけれ」等と言ってはいられない。子どもには言うことを認めてもらえないが、大人などより被害を受けるのは大きい。これからの人生に大きな負担がのしかかってくる。この前の中東においての戦争時に落とされた爆弾に入っていた「劣化ウラン」。これによって子供達がひどい状態になっていることに大人たちは解って

いるのだろうか。わかっていても「戦いにはつきものだよ」と言い切ってしまうのだろうか。生まれてきたばかりの子どもに責任があるのだろうか。ものも言えないうちから人間のエゴと傲慢さによって生まれた場所によって差別されている子供達が沢山いる。

母の愛を受けられぬまま病院にいる子ども、親の顔も見ずに死んでゆかなければならない子ども、こんな悲惨なことが続いていいのだろうか。五十余年前人間は賢くなったと思っていたのだが。目を瞠るばかりの発展、発明によって日常の生活は驚くばかり便利になった。それは人間の英知のたまものといえる……のに地球上では戦いは絶えることを知らない。積極的に進めている感さえある。生きている限り人種は違っても皆地球上に息をしている生物である。生きていて良かったと最後に言ってみたいものである。後につづく私達みんなの子供達の為に願ってやまない。

私達の親は戦争ばかりの人生だったと嘆いていたが、第九条・子供達に赤紙が来ないことを祈っている。

朴魯植俳句集　8　高島茂書写

あとがき

先月、打ち込みの声かけに、赤座様御夫妻が引き受けて下さった。今月からさっそくお願ひし、使はせていただいた。大助かりである。ありがとうございます。

先月のあとがきに（続）と書いた。今でも洗顔をしてゐないのではと思はれるのがいやなのでちょっとだけ続けるつもりで。ひとりになってから　家の中を片づけてゐると使い方の分からない物や見たこともない物を発見、いや発掘した。これらの物の殆どは子供たちも不要だといふのでわたしが使ふか捨てることになる。取っておくといふ選択はない。その中に石鹸が幾つもあった。これで顔を洗ふのもよいが洗顔クリームなる物をみつけた。これをすてるのも勿体ないので使ふことにした。ヘチマ水を使った化粧水があった。今洗顔後にこれを無くなるまで使ふことにした。といふことで何十年ぶりに朝の洗顔を励行している。以上前月号のいひ繕ひ。

カットを戴いてゐる人に福井美佐子さんが加はっていただいた。本当は扉にあをの俳句を書いて頂かうとお願いしましたが、書の代わりにカットを書いて下さったといふ次第です。うれしさと残念な気持ちと半々です。

（喜孝）

二〇一七年十月号
発行日　九月二十五日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／松村美智子・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）